

水の哲学

樋口一葉

「行水にも淵瀬あり 人の世に窮達なからめやは」

5千円札でおなじみの樋口一葉（1872-1896）は明治5年、下級官吏の7人家族の次女として現在の東京都千代田区内幸町で生まれる。本名は奈津。みずからは夏子と自称することが多かった。

19歳のときから東京朝日新聞小説記者の半井桃水に師事して小説を書くようになり、20歳で桃水主宰の文芸誌「武蔵野」に処女作『闇桜』を発表する。

生活苦によって住所を転々とし、小説に専念するために22歳のときに移り住んだ文京区西片で『たけくらべ』、『大つごもり』、『にぎりえ』などの代表作を執筆する。なかでも『たけくらべ』は文芸誌「めざまし草」の合評欄「三人冗語」で森鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨らに絶賛された。

旺盛な創作活動で文名を高めたものの、明治29年11月に肺結核で24歳の短い生涯を閉じた。

21歳のときに住んだ下谷竜泉寺町には一葉記念館が建てられている。

小説家としてのルーツ

幼い頃から父親に新聞を朗読して聞かせるのを日課としていた一葉は利発で向上心が強く気性の激しい娘だった。小学高等科第4級を首席で卒業したものの、母親の強い意見によって学業半ばの11歳で進学を断念させられた。一葉を不憫に

思った父親は『万葉集』、『古今集』、『新古今集』などを買い与え、文京区春日にあった中島歌子の歌塾「萩の舎」に入門させた。

入門後は和歌や習字や王朝文学を学び、17歳で父親が病死したあとは母と妹と3人で苦労しながら仕立てや洗い張りなどで生計を立てた。小説を書くようになってからは上野の東京図書館に足繁く通うようになり、そこで『日本書紀』、『日本外史』、『吉野拾遺』、『十八史略』、『太平記』、『今昔物語』などを借りている。

図書館での勉強とは別に紫式部の『源氏物語』や近松門左衛門の浄瑠璃本なども彼女の愛読書となった。一葉の長文の流麗な雅文体には明らかにこれらの影響がうかがえる。



名作「にぎりえ」を書いた文京区西片（本郷円山福山町）は当時、酌婦を置く銘酒屋という飲み屋が立ち並ぶ花街だった。主人公のお力はこの街の酌婦をモデルとしている。作品が評判になってから一葉は「今紫式部」と呼ばれたりした。

良いときも悪いときも

表題の「行水にも淵瀬あり 人の世に窮達なからめやは」は小品『さをのしづく』で「はかなくて世に落はふれたる人を おろかにつたなしとてあざけらんは恥かしかるべし」という言葉のあとに出てくる。水の流れに淵や瀬があるように人生にも良いとき悪いときがあるという意味だ。

タイトルの「さをのしづく」は『源氏物語』の主人公のひとりである薫の君が詠んだ歌のなかにある。平安京の宇治を舞台とした通称「宇治十帖」の最初の巻の「橋姫」における「橋姫の心を汲みて高瀬さす さをのしづくに袖ぞぬれぬる」だ。橋姫とは宇治橋の橋姫神社に祀られている水の女神、高瀬とは宇治川を行き来する高瀬舟の船頭をさす。

一葉の他の作品や日記でも小舟や浮き草は自分自身の象徴的なイメージとして繰り返し描かれている。一葉は高瀬舟の船頭の袖を濡らす竿の雫に生きることの「淵瀬」や「窮達」を見ていたのかもしれない。



彷徨する葦の舟のように

一葉は小説以外にも膨大な数の日記を遺している。19歳で書き始めた最初の日記「若葉かげ」は半井桃水との出会いから始まり、以後「蓬生日記」、「しのぶぐさ」、「塵中日記」、「水の上日記」など恋の相手である桃水をメインに書かれていて恋愛日記とも呼ばれている。

桃水は妻の病死後、東京朝日新聞の専属小説記者として故郷の対馬から弟や妹を引き取り、親代わりとして一家をかまえていた。この頃に一葉は小説の指導を受けるようになり、長身で美男子の桃水に一目惚れしてずっと恋心を抱きつづけたという。

その桃水が創刊した文芸誌「武蔵野」に発表した処女作『闇桜』ではじめて一葉女史というペンネームを使った。その由来には諸説があるものの、少女時代から暗誦していた蘇東坡の詩のなかには「駕一葉之扁舟」という一節があった。零落して転居を繰り返すわが身を一葉の葦舟と重ねあわせていたといっている。

晩年の病床では「身はもと江湖の扁舟、みづから一葉となつて葦の葉のあやふきをしる」と書き遺している。

流転し、漂流し、彷徨する葦舟はそれでも最後まで止まることはなかった。

（高倉克也）